

3月3日 雛祭り



(Drawn by Akino SASAKI)

男は窓の近くにある机の上をきれいに掃除している。

そこに積み上げてあった本を本棚に戻し、ほこりを払い、そして、雑巾できれいに拭く。

すっきりとした机の上を満足そうに眺め、男は机の引き出しの中から小さな

箱を取り出す。男の手に収まるぐらいのその小さな箱から、雛人形が出てくる。

小さな男雛と女雛が、それぞれ一体ずつだ。

男は卵でも扱うかのように、丁寧に、丁寧に、その人形を机の上に飾る。

そして、最後に、白い花瓶に一枝の桃の花を生けて、人形の後ろにおく。

机の上の雛人形を眺めながら、男は思う。

ああ、季節は巡り、今年もまたこれを飾る時期になった。娘は今年で25歳になる。そろそろ結婚してもいい年頃だ。でも、私が結婚のことを口にしたら、娘はきっと嫌な顔をするだろう。娘というものはなんとも扱いが難しいものだ。

娘が生まれたとき、妻は真っ先に雛人形を買いたいと言った。妻はずっと女の子が欲しかった。娘と一緒に雛人形を飾り、雛祭りを祝う。甘酒に雛あられ、それから着物を着せた娘の頭には、大きな髪飾りも飾ってやる。それが妻のささやかな夢だったのだ。

ただ、妻が夢見ていた豪華な雛人形は、この狭いアパートには大きすぎて無理だった。その代わりに、三人官女（さんにんかんじょ）も五人囃子（ごにんばやし）も、男雛や女雛を飾る屏風（びょうぶ）やぼんぼりもない、ただ一對の男雛と女雛だけの小さな雛人形セットを買った。そんなささやかな雛人形でも、妻は幸せそうだった。

雛人形を飾り始めるのは毎年だいたい2月の終わりごろで、特に決まった日はない。でも、片付けるのは決まって3月4日、雛祭りの次の日だった。妻は

「雛人形を片付けるのが遅いと、娘の結婚の時期も遅い」という俗説を固く信じていた。「結婚が遅くなっちゃったら、この子がかわいそう」ということをいつも言っていた。

それから毎年、私たちは一回も欠かすことなく、この雛人形を飾り、3月3日にはひな祭りを祝ってきた。結婚するとき、娘はこれを一緒に持っていくだろうか。それとも、ここにおいていくだろうか。

そんなことを思いながら、男は雛人形をずっと眺め続ける。



都会から離れた病院の一室で、看護師はベッドで眠る男性患者の隣に立ち、心の中でつぶやいた。

「どうして、こんなところに雛人形が・・・？」

男性患者のベッド脇には、男雛と女雛だけの雛人形が飾られていた。可愛らしい顔をした、男雛と女雛だった。そして、その隣で、患者は目を閉じたままだ。

患者の容態は落ち着いてはいたが、もう先は長くない。本人もそれを知っている。この病院は治療で病気を治す場所というより、死が近い患者が少しでも痛みのない最期を迎えられるようにするための場所だった。

雛人形について不思議に思いながらも、看護師はすぐにベッド脇を離れた。看

護師の毎日は忙しいのだ。

それから数日間、雛人形はずっとその男性患者のベッド脇に飾られていた。それがどうしても不思議でしかたのない看護師は、同僚に聞いた。

「ねえねえ、あの患者さん、どうして雛人形飾ってるの？今って、雛祭りの季節でもないのに。」

同僚は答えた。

「さあ、私も詳しくは知らないの。何か大切な思い出でもあるんじゃないかな。ほら、あの人、ご家族がお一人もいないでしょう？結婚して、奥さんも娘さんもいらっしやったらしいけど、娘さんがまだ小さいときに、二人とも交通事故で亡くなっただらしいわ。あ、もしかしたら、あの雛人形、奥さんと娘さんの思い出の品かもね。」

それから更に数日後、男性患者は息を引き取った。結局、看護師は最後まで、雛人形のことを聞くことはなかった。

(1474 字)

(2022.7 Written by Yuki MORI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典 : 「たどくのひろば」 (<https://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.